小説 栗栖ティナ

挿絵 カズナリ

立ち読み版

プロローグ　僕の甘い日常　006
一章　『オトナ』の証　021
二章　お姉ちゃんだって、甘えたい　066
三章　レッスンは厳しく激しく、そして甘く　111
四章　束の間の蜜月　155
五章　新たな関係　182
エピローグ　そしてレッスンは続く　228

登場人物紹介

Characters

秋山芯愛（あきやま しあ）

秋山家の長女。弟である有人のことを溺愛していて、ついつい甘やかしてしまう。一家のムードメーカーでもある。

秋山涼莉（あきやますずり）

秋山家の次女。芯愛同様、有人のことを溺愛しているが、男らしくなってほしいとも考えていて、鍛錬をつけることも。

秋山瑠璃子（あきやま るりこ）

有人たちの義母。成人していない有人に代わって、秋山財閥を預かっている。血は繋がっていないが、有人たちを家族として愛している。

秋山有人（あきやまあると）

秋山家の長男。一族の掟に従い、女性を孕ませることに。

朦朧とする意識の中、辛うじて残った理性がそんな疑問を訴える。
事態を把握しようと視線を泳がせていると、あんぐりと大きく口を開けたまま絶句している次姉の姿が視界に飛び込んできた。
「は、はは……破廉恥だ、不謹慎だ!!　な、なにを考えているんだ、姉さん！」
ようやく再起動した涼莉が、バンッと乱暴に机を叩きながら立ち上がる。
目の前で繰り広げられる姉と弟の濃厚なキスに圧倒されているのか、それ以上言葉が続かずに口をパクパクと忙しく開閉させ、視線も泳ぎっぱなしになっていた。
「なにを考えているって……んっ、決まってるじゃない。二番目は、早い者勝ちだって約束だったでしょう？　だから……ちゅっ、はぁ、んちゅっ」
「うっ、だ、だからと言って、食事中にそんな……」
「もう……一秒だって我慢したくないの！　一番がもらえなかったの、凄く切なかったんだから。文句あるなら、すーちゃんも早く素直になればよかったのに……」
慌てふためく妹に、芯愛は呆然と蕩けた弟と甘ったるいキスを続けながら誘いかける。
「そんな、できるわけがないだろう、はしたない……うぅっ、もう私は知らん!!」
名残惜しげに何度も姉と弟の方を振り返り見ながら、涼莉はその長いポニーテールを振り乱す勢いで食堂から飛び出していってしまった。
「ふぁぁ……す、涼莉お姉ちゃん……あふぅ」

その後ろ姿を呆然と見送る有人は追いかけなければいけないと思いながらも足腰に力が入らず、ただぐったりと座り込んだままでいるしかなかった。

姉弟三人で仲良く朝食を楽しんでいたはずが、どうしてこうなったのか。

口内を丁寧に舐め味わわれて今にも舌や粘膜が溶けてしまいそうな熱感に浸りながら、込み上げてくるそんな疑問を瞳に浮かべて間近に迫る長姉の顔を見つめる。

「んっ……ふふっ、すーちゃんったら本当に恥ずかしがりやさんなんだから。あの子とするときは……あっくんがもっと積極的に誘ってあげないとダメかもしれないわね」

「ふぁぁ、はぁ、す、するぅ……？」

「そう。そのときの為にも……んふっ、はぁ、今はお姉ちゃんが教えてあげるわ」

息絶え絶えになりながらも問いかけた少年に答えた芯愛が、肩に回していた右手を外すなり、それをゆっくりと股間の方へ滑らせてきた。

パジャマの薄いズボン越しに、はっきりと伝わってくる温もり。昨夜感じた義母のそれと甲乙付け難い心地よさだ。

「あはっ、あっくんの大事なところ触っちゃってる。小さい頃、お風呂でいつも洗ってあげてたところ……なでなでしちゃってる」

「くふぅっ、芯愛お姉ちゃん、らぁ……んふっ、らめぇ、ふぁぁっ♪」

柔らかな手の平が貪るような激しさでその部分を撫で回し、布地越しに敏感な部分を強

く摩られる刺激に堪えきれず少女のような黄色い声を漏らしてしまう。
明け方まで義母とレッスンを続けて気だるさが残っていたはずなのに、肉幹は断続的に芯を走る甘い痺れに合わせ、硬くふくらんできてしまっていた。
「あは、凄い……男の子のオチンチンって、こんなに硬くなるんだね。ズボンが破れちゃいそうなくらい、パンパンだよぉ。……もうちょっと、弄ってもいい？」
その敏感な反応が面白かったのか、芯愛はズボンに浮かび上がってきた肉竿を軽く掴むなり、その形を確かめるように軽く扱き始めた。
「くひぃっ、うう！　さ、触っちゃダメだよ、そこ……んはぁ、あぅう!!」
布地越しにパンパンに張りつめた竿肌が優しく摩られ、そのくすぐったいようなむず痒いような淡い刺激にじっとしていられず背筋を仰け反らせてしまう。
ペニスも長姉の奉仕を悦んで痙攣を繰り返し、先っぽから少しずつ熱い汁が滲み出てきてしまっているのが、濡れたトランクスの感触ではっきりとわかった。
「嬉しい……お姉ちゃんともレッスンしたいって、オチンチンが準備してくれてるよ」
「ふぁぁ、はぁはぁ……レ、レッスン……」
姉の弾んだ声を聞いた途端、今朝、別れ際に義母が残した言葉が脳裏に浮かんでくる。
『本当はお仕事を休んで、ずっと有人くんの特訓をしてあげたいけど……私が独り占めしていたら、お姉ちゃん達に怒られてしまうから』

まだ甘い一夜の余韻で夢見心地だったせいもあり、深く考えることはしなかった。
そういえば昨夜、行為の前にもそんな話を聞かされたような――。
「すーちゃんはまだ心の準備ができていないみたい……次は私。あっくん、立派な当主になれるように、お姉ちゃんを孕ませて……ね？」
少し恥ずかしそうに微笑む芯愛の口から飛び出した、想像していたとおりの言葉。
深いキスと昂る屹立の痺れに翻弄されていた有人は驚きの声を上げる余裕もなく、ただ荒く熱い吐息を切らしながら呆然とするしかなかった。
（やっぱり、そういう話……だったんだ）
昨夜、三人の大きな乳房に圧迫されて気を失う直前、誰が自分の赤ちゃんを孕むかで譲らず争っていたのを思い出す。仲良く、幸せは常に家族みんなで分かち合うのが秋山家の方針だ。今回もそれに沿って解決するとしたら、それ以外の方法はなかっただろう。
（でも、お姉ちゃんとも……し、しちゃうなんて）
既に義母と一線を越えてしまったが、だからと言って割り切れるものではない。
そもそも家族ということを別にしても、同時に複数の女性に手を出すのはモラル的に大問題だ。しきたりを守る為だけならば、相手はひとりでいいはず。――だが。
「……お姉ちゃんとは嫌？　お母さんとしか、子作りしたくない？」
名残惜しそうに唇を離すなり不安そうな瞳で尋ねてきた芯愛に、首を横に振って返すこ

となどできなかった。誇張ではなく、すべてを自分に捧げて愛してくれている長姉を悲しませることは、有人にとってなによりも辛い。
（それに、僕も……もうドキドキ止まらないし……）
男女として愛し合う快感を一晩かけてじっくり教え込まれた今、こうして屹立を撫で摩られながら豊かな乳房を惜しげもなく押しつけられているだけで、求められている行為への期待に胸がふくらんできてしまう。
「ねっ……しよ。お姉ちゃんも、あっくんの役に立ちたいの。だから……」
「う、うん。僕……したい。お姉ちゃんと……」
自らセーターを脱いで襟元ネクタイを緩めながらにじり寄ってくる長姉に、有人は引き止めようとする様々な理由をすべて振り切って求められるまま頷き返す。
ズボン越しに握られた竿もひと回り大きくふくれあがり、優しい姉の期待に応えたいという思いを伝えるようにビクビクと力強い脈動を始めていた。
「ふふっ、嬉しい♪　オチンチンもやる気満々になってくれてるね」
「うっ、は、恥ずかしいよ……ちゅっ、んふっ、はぅっ、んん！」
羞恥を訴えようとした刹那、またヨーグルトと唾液で濡れた唇で口を塞がれた。すぐに舌が滑り込んできて、口内をくすぐるように舐め回される。
「んふっ、ちゅぱっ、はむっ、んん！　おねえひゃぁ……んんぅ……れろぉっ、あふぅ」

うっとりと身を任せかけた刹那、義母と交わしたオトナのキスを思い出す。
自分を一人前に育てようと、身体を捧げてくれているのだ。教えてもらったことを生かして成長していることを証明しなければならない。
胸に込み上げてきた使命感に背を押されるまま、有人は自らぎこちなく舌を動かす。
「んちゅっ、ちゅぅっ、ちゅぱ……んはぁっ、んんっ！」
「くふぅっ、はぁ、あんんぅっ！　あっくんぅ……ひゃうぅっ、うう‼」
まずは入り込んできた姉の舌を自らの舌で搦め捕る。
一方的にしゃぶられるのではなく、自分からも舌の表面を擦りつけるようにしてより淫らな水音を響かせて互いの唾液を分かち合う。
生き物のように蠢く舌同士が強く擦れ、焼けるような火照りを感じる。より大量の唾液が流れ込んできたところで、それを潤滑油にして芯愛の口内へ舌先を侵入させた。
「あぁ、んぅっ、お姉ちゃん……ちゅっ、僕も……舐めるっ、はむぅっ」
舌先で唇の裏側や歯茎、さらに頬の内粘膜をくすぐるように舐め突く。
義母が実践で教えてくれたキスを思い出しながら、ヨーグルトの爽やかな酸味が残る口内全体を味わうように舌を熱く動かす。
「くひっ、んちゅ、はふんぅ♪　あはっ、いい……上手、あっくん……ちゅっ、お姉ちゃんのお口、蕩けちゃう。れろっ、んふぅ……ちゅううっ」

「んちゅぅぅ、はぁはぁ、僕もぉ……ちゅぱっ、気持ちいい……んぐっ、れろぉっ」
唇の隙間から甘ったるい褒め言葉が漏れるのを聞くと、なんだか胸がくすぐったい。
いつもお世話になってばかりだった姉を自分が悦ばせてあげている。自分が一人前の男として着実に成長していると実感でき、ますます舌の動きが熱を帯びていく。
「もっと……ちゅっ、んちゅっ、芯愛お姉ちゃんに気持ちよくなって……欲しい」
「はむっ、んふっ、あっくんったら。お姉ちゃんが教えてあげるつもりだったのに……そんなこと言われたら……くふぅっ、はぁ、う、嬉しすぎて……おかしくなっちゃう」
目尻を下げて微笑む長姉が、有人の肩を両手で掴んで少し残念そうに身体を離した。
「ぷはっ、はぁ……芯愛お姉ちゃん……あの……」
「キスは合格。次は……違うところで、お姉ちゃんを気持ちよくして欲しいな」
囁きながら芯愛は、椅子に座ったまま少し恥ずかしそうに細い両脚を広げ始めた。
そのままえんじ色のミニスカートの裾を摘み上げ、自らの手で股間をさらけ出す。
「っ!?　えっ、あ……」
あらわになったスカートの中を見た途端、有人は思わず言葉を失ってしまう。
捲れた布地から覗き見える、蜂蜜色の薄い茂みとその奥に隠された薄桃色の蜜裂。
本来ならショーツで包み隠されているはずの秘所が、剥き出しになっていたのだ。
「待ちきれなかったの。あっくんに赤ちゃんを孕ませてもらえるんだと思ったら。朝、す

ぐにしてもらえるように……ちゃんとシャワーも浴びて、準備しておいたんだよ」
言葉を失っている少年に赤く染まった頬を緩めて告げながら、金髪の長姉はむっちりと艶やかなふとももをより大胆に広げ始めた。
クチィ……小さな水音を響かせながら、真っ直ぐな縦筋が少しずつ解れ始める。
「ふふっ、昨日、お母さんにも見せてもらった？　女の子の……恥ずかしいところ」
恥ずかしそうに震える声で問いかけながら、芯愛は自らの右手を股間に伸ばし、ぷっくりと盛り上がった肉唇を中指と人差し指で開いた。
絡み合っていた薄い肉ビラが離れ、限りなく白に近い桜色の粘膜がさらけ出される。
「え、えと……見せてもらってない。昨夜は……それどころじゃなくて……」
ほとんど横たわったまま、すべて義母に優しくリードしてもらっただけ。途中からは赤ちゃんのように乳房を吸いしゃぶるのに夢中で観察する余裕などなかった。
「嬉しい……あっくんが初めて見るオマ〇コは……お姉ちゃんのオマ〇コなのね」
「オ……あぅ……」
上品な姉の口から飛び出した卑猥な単語に、思わず鼓動が高鳴ってしまう。
呟いた当人も恥ずかしいのだろう、開いた割れ目の中に刻み込まれた肉皺が羞恥を訴えるように震えていた。
「それじゃあ……お姉ちゃんが教えてあげる。女の子のここ……赤ちゃんを孕む場所のこ

とは、ちゃんと知っておいた方がいいと思うから。……あっくん、見ていてね」
意を決するように頷いてから、姉は左手も自らの股間へ伸ばしてきた。
立てられた人差し指が、まずは盛り上がった周囲をゆっくりとなぞっていく。
「あふっ……こ、ここが大陰唇……オマ〇コを守ってくれてる外側のヒダ……ここを優しく広げてぇ……はぁはぁ、な、中に見える薄いヒダが小陰唇……くふぅっ♪」
説明に合わせて指先が内側へ伸び、蠢いていた皺を軽く弾いた。
声が上擦るのに合わせて艶めかしい水音が響き、皺の隙間から透明の雫が垂れる。
「あふぅっ、見える？　このお汁……これがち、膣分泌液……愛液って言った方がわかりやすいかしら？　女の子が、大好きな男の子の赤ちゃんを孕みたいって思ったときに、オマ〇コの穴……ち、膣から溢れてくるの。ここ……んふっ、あぁっ！」
濡れた肉ビラを掻き分けるように弾きながら、指先が縦長の楕円に広がった割れ目の中央にある、小さな穴口へ到達した。軽く突くとそれだけで活発に開閉を繰り返すそこから、食い入るように見つめる少年の視線を煽るように透明の愛蜜が滴り溢れる。
「凄く濡れてるよ、芯愛お姉ちゃん。お汁、いっぱい垂れてきて……」
「だって……あっくんに、恥ずかしいところじっと観察されちゃってるなんて……もう頭がおかしくなりそう……はぁ、んんぅっ♪」
爆乳を揺さぶるように背もたれに預けた身体をくねらせながら、芯愛はそれでも秘所か

ら指を離すことなく、少年の視線を煽るように肉皺を掻き分けてくれていた。
「……見たい。僕、もっと……」
休みなく震えるヒダと肉口に誘われるまま、有人は我慢できずに椅子から降りて床に屈み込み、鼻先がそこに触れそうな至近距離でじっと覗き込んでしまう。
かなり前から濡れていたのだろう、蒸れた熱気が柑橘類に似た甘酸っぱい匂いと共にそこから漂ってきた。荒く息を切らしていると、淫らな香りが胸いっぱいに広がってくる。
「芯愛お姉ちゃんのここ、いい匂い……甘くて……」
「それじゃあ……味見……してみる？　お姉ちゃんのオマ〇コ……」
「な……舐める？　お姉ちゃんの……そ、そんな……いいの？」
「恥ずかしいけど、あっくんなら……お姉ちゃんの全部、味わって♪」
「う、うん……」
真っ赤な顔で唇を震わせながら促してきた芯愛に答え、有人は改めて目前で震えている蜜裂を凝視する。この美しい長姉のもっとも淫らなところへ舌で奉仕するなんて、想像するだけで頭の芯が痺れるような興奮が込み上げてきてしまう。
「い、いくよ……芯愛お姉ちゃん」
ゴクリと思わず生唾を飲んでから、有人は漂ってくる蜜臭に誘われるようにして震える秘裂へ舌を伸ばした。

「れろっ、んちゅっ、ちゅぱっ、んんぅっ……」
「ひゃぅっ！　あぅっ、あっくん……本当に舐めて……んふっ、ひいいっ‼」
舌先がぷっくりとした大陰唇に軽く触れた瞬間、芯愛の声が高く跳ね上がった。
（感じてくれてるのかな、芯愛お姉ちゃん……）
悦んでもらえていることにホッとしながら、そのまま恐る恐る大陰唇をなぞるように舌を動かし、そこを濡らす蜜液を舐め取っていく。
（凄くとろりとして……甘くて、しょっぱくて……不思議な味。これがお姉ちゃんのエッチなお汁……オマ〇コの味……）
舌先にじわじわ染み込んでくる初体験の淫らな味に、もう真っ直ぐに座っているのも難しいくらい頭がクラクラとしてきてしまう。
「はぁ、んちゅっ、美味しい……芯愛お姉ちゃん、ちゅぅっ、んちゅぅっ！」
「ひぐぅっ、んん！　あっくん、あ、あまり強くしすぎちゃ……めっ……はぁはぁ、優しく……ね。女の子の身体で、一番敏感で弱いところだから」
「ふぁ……あっ、う、うん。ごめんなさい……ちゅっ、はぁ……んふっ」
いつの間にか舌に力が入り、より濃い味を求めて綻ぶ割れ目の中央に見える薄い肉ビラを乱暴に舐め弾いてしまっていた。
我に返った有人は、強く押しつけていた舌を慌てて離す。

（そうだよね。昨日、ママも僕のオチンチン……凄く優しくしてくれたし）

皮を剥くときは別として、それ以外は頭を撫でてくれているときのような優しさで可愛がってくれたことを思い出す。女の子のここも、同じように扱うべきだろう。

「ちゅっ、れろ……んちゅっ、はぁ、ちゅぱっ……」

そっと撫でるような優しさで。そう意識しながら、小刻みに震える肉皺や穴口を舌先で丁寧に舐め弾いていく。

「んんぅっ、はぁ、そ、そう……それいい。優しいの好き……くふぁ、はううう♪」

頭上から聞こえてくる姉の嬌声も、ますますうっとり甘く蕩けてきた。

物欲しそうに蠢く穴口から溢れてくる愛液は、舌の動きに合わせてよりねっとりと濃くなり、甘酸っぱい匂いも濃くなってきている。自分が愛しい姉を悦ばせてあげられていると強く実感でき、頭の芯が痺れるような激しい歓喜が込み上げてきて止まらない。

「あっくん、本当に上手……はぁ……そのまま上の方。ここもして……」

熱っぽい吐息混じりの声で訴えながら、芯愛は左手の指を割れ目の上端へ滑らせた。

そこにあった包皮の中、先端の穴から真珠色の肉粒がわずかに覗き見えている。

「ここ、クリトリスって言うのよ。オマ〇コの中でも一番敏感で……怖いくらい感じちゃう場所。だから、凄く優しく舐めてみて……」

「クリトリス……」

教えてもらったばかりの呼称を呟きながら、有人は割れ目の中央を舐め上げるようにして舌を上に滑らせていく。そのまま、まずは包皮ごとそこを軽く突き転がしてみた。
「ひくっ、はぁ、そう……いぃっ、んふっ、はんんっ♪」
「はぁ、んちゅっ、ここ……凄く硬くなってる。ちゅっ、んちゅぅっ」
「う、うん、凄くエッチになっちゃってる……あっくんに、感じやすいところいっぱい舐めてもらえてぇ……もう、ダメ。お姉ちゃん、我慢できない……はふぁぁっ！」
コリコリとした小さな粒を舌先で弾く度に、長姉はその美しく輝く金髪を振り乱しながら喘ぎ悶える。包皮の表面がパンパンに張りつめるほど肉粒がふくらんできて、まるで舌が火傷しそうなくらいの熱感も伝わってきた。
（直接舐めたら、もっと気持ちよくなってくれるかな……？）
むせ返る甘美な匂いと姉の嬌声に酔って意識朦朧となりながら、姉をもっと悦びに導いてあげたい一心で包皮の穴口へ丸めた舌を挿し入れた。
昨日、義母が自らの皮を被った屹立を剥いてくれたときを思い出し、包皮と肉粒の隙間へ唾液を塗り込むように優しく舌先を動かす。
「きゃふぅっ、そぉ、そこ……直接……らめ……んひっ、いいいい！　くりゅぅっ、お姉ちゃん……きちゃ……んはぁっ、イク……くんっ、はひぃぃぃぃっ!!」
「むぐっ、んむっ、ううう!?」

唾液でわずかに薄まった淫液をこぼしながら、涼莉は竿や雁首の裏側に残ったものまで舐め味わおうと、執拗に舌を絡めてきていた。
「ひゃぅっ、あぁ……く、くすぐったいよ、涼莉お姉ちゃん……んふぅっ」
「我慢しろ……んちゅっ、綺麗に掃除しておかなければ……んふっ、それに……せっかく有人が出してくれた種を無駄にするなど、できるわけがない……ちゅぱっ、はむぅ」
熱に冒されたかのようにうっとりとした表情で呟きながら、次姉は絶頂直後で感度が高まりすぎている少年の肉幹から口を離すことなく、丁寧に舌を這わせ続けていた。
鈴口を舌先で突かれ、名残惜しげに何度も強く吸われる。尿道の奥まで丁寧に清められるくすぐったくも幸せな快感に、有人は耐えられず背筋を痙攣させてしまう。
「はぁはぁ……す、涼莉お姉ちゃん……全部、飲んじゃったの？　本当に……」
ぐったりとベッドに座り込んだまま、同じように普段とはまるで違う淫らに上気した表情のまま余韻に浸っている次姉の顔をじっと見つめて問いかける。
「言っただろう……ちゅっ、はぁ、お前の世話は私がすると。大切な子種を無駄にはできないしな……ふふっ、さすがの姉さんや母様でも、ここまではしていないだろう？」
涼莉は赤い舌先で口の周りに残っている精液の残滓を舐め取りながら、悪戯っぽく微笑む。その言葉の奥には、今まで目の前で見せつけられていた分を一度に取り返せたという深い喜びが透けて見えた。

「……有人、私もお前が大好きだ。姉さんや母様に負けないくらい……お前を喜ばせる為なら、どんなことでもしてやりたい……心からそう思っているんだ」

「涼莉お姉ちゃん……」

チュッとまだ勢いを失っていない屹立の先へ唇を落としながら、少し恥ずかしそうに告白してくる。そんな涼莉の言葉に少年の鼓動は鎮まることなく高鳴ってしまう。

剛直が小さく震えながらふくらみ、精を迸らせる前よりもさらに大きく勃起する。

表皮に太い血管が浮かび上がり、もっとこの愛しい姉のことを感じたいと言わんばかりに力強い脈動を繰り返し始めた。

「げ、元気だな。オチンチンは、一度射精すると少し休憩が必要だと雑誌には書いてあったのだが……さ、さすが普段、私が鍛えているだけのことはあるたくましさだな！」

「う、うん……それに涼莉お姉ちゃんがとっても綺麗だから……僕……」

その勢いに圧倒されているのか少し目を丸くして呟く姉に、有人は未だ痺れている腰を軽く浮かせてペニスを突き出して訴える。

口だけでは我慢できない、この厳しくも美しい次姉にも子作りの手解きをしてもらいたい。そんな狂おしい衝動が胸いっぱいにふくらみ、抑えることができなかった。

「……そうだな。こ、これだけ元気があるのだし……稽古を続けることにしよう」

そう少し緊張したように声を震わせながら立ち上がった涼莉は、手早く帯を解いて紺色

の袴を脱ぎ捨てる。少し長めの道着だけに隠されていた恥丘は、他に隠すものなく割れ目の方まで続く薄い茂みがあらわになってしまった。
「その、ふ、普段から道着のときは下着はつけないんだ。決して、初めから剣道の稽古の後はこちらの稽古をつけてやろうと思って準備していたわけではないぞ！」
有人の視線を意識してか、問いかけるまでもなく言い訳がましく訴えてくる。
だが、その目線が不自然なくらい泳ぎ、ほっそりと引き締まったふとももが落ち着きなく擦り合わされているのを見る限り、おそらく……そのつもりだったのだろう。
（なんだか……可愛いな、涼莉お姉ちゃんって）
どことなく愛嬌のある芯愛と違い、彼女は凛と大人びているように感じていたが、今日はその仕草ひとつひとつに愛らしさを感じてしまう。
思わず頬が緩んでしまうと、それにめざとく気づいた次姉が唇を尖らせて訴えてきた。
「なんだ、そのニヤついた顔は‼　い、言っておくがこれは稽古だぞ。遊びではないのだから、素振りをしていたときと同じように気持ちを引き締めろ！」
「あぅ、は、はい！　……えと……それじゃあ、どうすれば……」
少し上擦ってはいるものの、普段どおりの厳しい声で叱咤されて反射的に背筋を伸ばした有人は、まだズキズキ痛む右足を一瞥してから問いかける。
少しマシになってきたとはいえ、まだ支えなしで立ち上がって荒々しく動くことは難し

い。こうして膝立ちになるのが精一杯だ。
「心配するな。母様と姉さんに教えを乞うたとはいえ、まだまだ不慣れだろう。足の具合のこともあるし……今日はしっかりと私がリードしてやる」
道着からこぼれ落ちている豊かな双丘を見せつけるように胸を張って訴える涼莉だが、その唇が小さく震えていることに有人は気づいてしまう。
（多分、涼莉お姉ちゃんも初めて……だよね）
この緊張している雰囲気から察するに、もうひとりの姉と同じように彼女もまた純潔を弟である自分に捧げてまで、子作りを教えてくれようとしているに違いない。
（お姉ちゃん達、両方とも初めてのエッチが僕なんだ……凄い）
モラル的に問題があることだとわかっていても尚、込み上げてくる言い知れぬ喜びで胸が熱くなり、勃起の勢いがますます増していく。
「や、やる気は十分のようだな。それでは……始めるぞ」
また自らの決意を固めるように小さく息をついた次姉が、少年へ背中を向けるようにして四つん這いになった。
捲れ上がった道着の裾から、まるで桃のように形よく真っ白な尻房があらわになる。
中央に真っ直ぐ伸びた割れ目が左右に綻び、その奥に桜色の淫花が覗き見えた。
薄暗くてはっきりとは見えないが、今朝、マジマジと観察した長姉のそこよりもさらに

色素が薄く、皺も浅い感じ。パックリと口を開けている花弁が照って見えるのは、膣口から滲み出た愛液に塗れているせいだろう。ほのかに漂ってくる濃密な甘酸っぱい香りも、それを裏付けてくれる。

（濡れちゃってるんだ、涼莉お姉ちゃんも……僕の精液を飲んで……）

そう意識するだけで目眩がするほど興奮が高まり、早く入りたいと言わんばかりに肉槍の脈動が活発になる。

振り返ってその動きを確かめていた涼莉は、その勢いに驚いたのか軽く眉を顰めつつ右手を伸ばして竿の根元を掴み、そこへ突き出したヒップを近づけていった。

「いくぞ、有人。い、入れるまでは私がしてやる……だから……動くなよ」

「う、うん……」

教えてもらう立場ではあるし、最初は既に経験がある自分よりも初体験の次姉のペースに合わせた方がいいだろう。口に出すとムキになって強がりを言うであろう彼女の性格を察して素直に頷き、できるだけ入れやすいように軽く腰を迫り出すだけに留めておく。

「い、入れるぞ！　本当に入れてしまうからな!!　私は有人の姉なのに……オ、オチンチンを中に入れて……こ、ここ、子作り……教えてやる！」

その背徳感を改めて噛み締めるように叫んだ直後、四つん這いになった涼莉は勢いよく尻房を突き出し、自らの手であてがっていた屹立の先を割れ目の中央に沈めていく。

ズップ――ヌチュウウッ……ヌップリュ……。

濡れた粘膜肉を押し分ける――昨夜から急に馴染み深くなった音と共に、肉槍が焼けるように熱い蜜壺へ埋まっていく。

硬くふくらんだ亀頭が雁首の辺りまでどうにか入った途端、まるで吸い上げるように収縮した肉壁にきつく圧迫されてしまう。

「はひぃっ⁉　す、涼莉お姉ちゃん……きつい……んくっ、あああっ！」

「あ、ああ……くふっ、はぁはぁ……有人のが想像以上にたくましい……からぁ……」

身体を鍛えているからだろうか、その締めつけは瑠璃子や芯愛とはひと味もふた味も違う。手で力いっぱい握られているような強烈な圧迫感だ。

浅い皺の刻まれた膣粘膜が隙間なく密着し、ギュウギュウと音が聞こえそうな勢いで沈んだ亀頭が吸いしゃぶられてしまう。強い痺れの中に締めつけがわずかに緩むタイミングに合わせて強烈な甘美感が走り、その度に狂おしい吐精衝動に襲われた。

「お姉ちゃん、き、きつすぎだよ、これぇ……はぁ、あひいいい⁉」

「私に気づかいは無用だ。下手にゆっくりすると痛みが強くなると、雑誌に書いてあったから……だから……ひと息にこのままぁ……はふぅっ、んん！」

息も絶え絶えな弟に答えた強がりな次姉は、小さく息を吐くと同時にその引き締まった桃尻を打ちつけるような勢いで押しつけてきた。

ズリュウウウウッ、ズップゥッ、ヌチュルルルゥッ！
ヒクつく肉道が無理矢理押し広げられ、壁面を濡らす大量の愛蜜を結合部から押し出しながら剛直が一気に突き進んでいく。
途中、なにかを突き破る衝撃が伝わってきた直後、ツルンと滑るように動きが加速してそのまま行き止まりの壁に亀頭が接触した。
「ひぎぃっ、ああっ、はぁ、は、入った……わかるか、有人？　お前のオチンチンが、私の中に……全部入って……んふっ、有人のぉ……弟のオチンチンが、私の膣に刺さってる……私も、有人に純潔を捧げられたぁ……あはぁ、はは……」
「うん、入っちゃってるよ、涼莉お姉ちゃん。僕のオチンチン、ちゃんと奥まで……」
荒く息を切らしながら歓喜の声を漏らす次姉へ、有人は未だ緩まない強い締めつけに腰を震わせながら答える。
膣道が少し浅めなのか、根元の部分が指一本ほど入りきらずに余っていた。
結合部から滴り溢れてくる愛液に細い糸のような赤い破瓜の印が混ざっている。窮屈ではあるが、思ったほど出血は酷くないようだ。
「涼莉お姉ちゃん、痛くはない……？　お姉ちゃん……少し休もうか」
「んっ、だ、大丈夫だ。多少、ヒリヒリとしているが、この程度なら……はぁはぁ、特に問題は……ない……んぅっ、くふぅっ、ああっ♪」

そう答えてくる次姉の声は息絶え絶えに震えていて、明らかに強がっている様子だ。

はっきりと指摘するのもためらわれ、有人は喘ぎ悶えながらぎこちなく動き始めた涼莉に身を任せることしかできなかった。

「いいか、有人ぉ……こ、こうして中に入れたら……ふぅっ、はぁ、つ、突くんだ。力強く……絶対に孕ませると気持ちを伝えるような激しさで……こうして……奥にオチンチンをぶつけて……くひぃっ、ひぅっ、あはぁぁっ！」

ヌチュゥッ、ズプゥッ……ニチュル……。

いつも剣道の指導をしてくれるときのように、できるだけ厳しい口調を取り繕いながら腰を振り動かす涼莉だったが、その動きは声ほど力強くはなかった。締めつけが強すぎるせいで振り幅は短く、有人の腰に尻肌をもどかしく擦りつける程度にしかならない。

「なぁ、中に引っかかって……有人のオチンチンで私の膣……捲られるようだぁ」

「うん……きつくて……いっぱい擦れるよ……くんぅっ、はぅぅっ」

そのわずかな抽送でも、剛直をひと回り小さく圧迫するようなきつさのおかげでかなり強烈な刺激を得ることができた。竿肌に深々と食い込む壁面の皺でゴリゴリと削られるかのような摩擦に、下半身全体が熱く痺れてきて堪えられなくなってくる。

息を吐く度に尿道へ熱い迸りの予感が込み上げてきて、鈴口から先走りとは言えない濃い汁が溢れ出てきてしまっているのがわかった。

「はひっ、あぁ、あ、熱い……子宮に、なにか塗り込まれて……んふぅっ、はぁ、も、もう出そうなのか？　私に種付け……するのか？」
「う、うん……あまり持たないかも……涼莉お姉ちゃんの中、気持ちいい……からぁ」
このままぎこちなくも激しい次姉の腰使いに身を委ね、思い切り精を吐き出したい。
そんな狂おしい衝動を噛み締めながら訴える――が。
「ダ、ダメだ。まだ……はふぅっ、あぁ、あまり早く出しすぎても稽古にならないだろうから……んふぅっ、もう少し……有人も動かなくては」
「ふぇっ、はぁはぁ……ぼ、僕も？　んぁっ、でも……くひぃっ、ああっ」
「いいから。す、素振りのときのように号令してやるから、私の……し、尻を叩くように思い切り腰を突き出してみろ。立派な当主に……私を支えられる強い男になったのだという証を……こ、子作りでも証明するんだ。いっぱい……くぅっ、いぃ、いちぃ……」
「う、うん……わかったよぉ、う、動く。僕……くんっ、はぅんんっ！」
まともに言葉も紡げないほどの快感を必死に堪え、愛しい姉の想いに応えたい一心で号令に合わせて腰を振り動かす。
ズッチュッ、ズプゥッ！
噛み締めるかのように狭まる肉壁をどうにか振り払い、表皮が強く引っ張られる甘美な疼きを感じながら真ん中辺りまで引き抜き、すぐにまた奥まで突き入れる。

（亀頭を、しっかり子宮口にぶつけて……受精させるんだって教えてあげる……）

傘の部分が活発に蠢く肉壁に弾かれ、意識を吹き飛ばすような甘い痺れが走る。

朦朧とする意識の中、昨夜から教え込まれたいくつかの手法を必死に思い返し、肉槍の先端が行き止まりに食い込むくらい深々と押し込んでいく。

「あふぅっ、ああっ！　し、子宮、持ち上がる……んふぅっ、いぃっ、そうだ、有人……そのたくましい突き上げ……お、男らしい……そのまま……にぃ……んふぅっ♪」

「う、うん！　動く……いっぱい……男らしく動いて、涼莉お姉ちゃんの子宮にいっぱい射精するぅ……赤ちゃんの素出して、孕ませちゃうからね‼」

跳ね上がった甘い声に気をよくした有人は、ペースを緩めず号令に合わせて抽送を繰り返していく。引き止めようと狭まる膣道を押し分けてギリギリまで引き抜き、反動をつけて子宮の中まで亀頭が埋まってしまいそうな勢いで挿す。

繰り返される抽送に合わせてより狭まってくる膣壁に幹竿が扱かれ、熱液が少しずつ搾り出される強い快感が走る。まだ達してはいけないと自分に言い聞かせ、込み上げてくる絶頂の予感を噛み殺しながら腰を振りまくった。

「ひゃぅっ、あんん♪　あぁっ、有人……いぃっ、おぉっ、おひりも叩くように……もっと強く……はんぅっ、あふぁあっ！　ごぉ……ろ、ろくぅぅっ♪」

「う、うん……涼莉お姉ちゃんのお尻、スベスベで綺麗で……こ、腰ぶつけると僕も気持

ちいい……ゾクゾクしちゃう。んふぅっ、はぁはぁうっ！」
パンッ、パンッ！　ズップゥッ、ヌプルゥ!!
少年の腰が突き出された桃尻を打つ度、真っ白だった肌面が赤く腫れてきた。
色合いのコントラストがなんとも言えない艶めかしさと征服感を味わわせてくれ、腰使いにも無意識のうちに力が籠もっていく。
「そうだ、有人ぉ……え、遠慮はするな！　腰、もっと振って……深く……もっともっと深くまで突き立てろ!!　この子宮がお前のぉ……弟のものだとオチンチンで命令するように激しく……じゅ、じゅぅ……んふぅぅっ♪」
「う、うん。涼莉お姉ちゃん、ここ……おっぱいもいいよね？　ポヨポヨ弾んでて、凄く気持ちよさそうだから……ギュッて……んふっ、くはぁっ」
抽送を繰り返しながら前のめりになり、四つん這いになった涼莉の背中へのしかかった有人は、そのまま手を前に伸ばして抽送の衝撃に合わせて艶めかしく揺れ動いていた爆乳を鷲掴みにしてしまった。
「じゅ、じゅうごぉ……きゃひぃっ、いい！　まぁ、待て、有人ぉ……胸、そ、そんなにいきなり……んふっ、ううう！」
強い弾力を楽しみながら指を乳房へ深々と食い込ませると、次姉はトレードマークのポニーテールを振り乱し、恍惚と声を乱し始めた。

揉みごたえのあるふくらみを捏ねるように揉み潰していると、それに合わせて膣内の締めつけがますます強くなってきた。

「あふっ、気持ちいいよぉ……おっぱいギュッてすると、オチンチンがいっぱい締めつけられて……いいっ、もっとっ、もっと締めて！　んふっ、あぁっ!!」

「ひぎっ、くんっ！　有人、まぁ、待て……そんなにされたらぁ……あひぃいっ!?」

切羽詰まった次姉の嬌声を聞きながら、理性のタガが外れてしまった有人は、夢中で乳房をこね回して抽送を繰り返す。

ゴリゴリと表皮が削れるような摩擦快感で無意識にかけていた腰使いのリミッターも吹き飛び、収縮する肉壺を抉り広げるように荒々しく突きまくる。

「もっと……いっぱいぃ……いっぱい気持ちよくなるぅ！　涼莉お姉ちゃんと一緒に感じながらぁ……あ、赤ちゃん孕ませたい!!」

「はぁ、いいぞ、有人ぉ、んんぅっ！　さ、最後……お前の思いを込めて、思い切り……私を孕ませたいという気持ちぃ……オチンチンで子宮に……ひぃっ、はぁはぁ……さぁ、さんじゅぅ……はひぃいいっ♪」

「う、うん、いくよ涼莉お姉ちゃん！　いっぱい入れる……子宮までしっかりオチンチンズブズブして出すから!!　お姉ちゃんに赤ちゃん孕んでもらう!!」

呂律の回らなくなった声で、それでもしっかり号令してくれた次姉に応え、引き止めよ

うときつく窄んだ膣口を肉傘で卑猥な形に捲りながら、亀頭が完全に飛び出るギリギリのところで動きを止める。直後、痺れた腰に溢れる次姉への想いをすべて込め、初めてのときは入りきらなかった根元ギリギリまでしっかりと突き立てていった。

ズリュゥッ、ヌッチュゥッ、ズプリュウウウウッ!!

「くふんんっ、あああっ！　いぃっ、あぁ、有人のオチンチンでゴリゴリぃ……きて……おぉっ、イイィッ、しぃ、しきゅうにぃきてぇ……はぁ、孕むぅっ……弟のオチンチンで命令されながらぁ、い、いっぱい孕みゅぅっ、んひぃっ、ひいいいいっ♪」

「出る……くふぅっ、あぁっ！　出ちゃう……はぁ、あふううう！」

行き止まりの壁に深々とめり込んだ亀頭が、物欲しげに蠢くそこに圧迫される。

壁面全体が力強く痙攣し、根元に溜まっているものが扱き出されるような感覚に身を委ねた直後、身体の奥で我慢に我慢を重ねていた射精の衝動が爆発した。

ドップゥッ、ビュブリュゥッ、ビュルルルルルル！

「はひぃっ、んぉっ、おおお！　いぃっ、で、出てる……有人の……せぇ、精液……本当にきてる……子宮、いっぱいに……こんなぁ……ひふぁ、ううううっ！」

ガクガクと全身を震わせる汗塗れの次姉を見下ろしながら、力強い射精を繰り返す。

強く圧迫してくる膣壁を押し返そうと幹胴はいつもよりも太くふくらみ、そのおかげで一度に噴き出る精液の量も増していた。

『急いできてくれなきゃ、めっ……よ。お姉ちゃんもお母さんもすーちゃんも、拗ねちゃうんだからね！　それじゃあ、後で～』

ほとんどこちらから言葉を返す間もなく、ガチャリと切られてしまう。嵐のような勢いに圧倒された有人は受話器を耳から離すのも忘れ、しばし呆然と固まってしまった。

「どうしよ……」

机に積まれた書類の見直しは、できれば今日のうちに済ませておきたいところだったけど、あんな風に言われたら待たせるわけにもいかない。なにより、みんなでなにをしてくれるのか想像すると鼓動が一気に跳ね上がり、とても仕事を続ける気分にならなかった。

「これくらいなら、明日の朝にすぐ済ませられるし……」

最近、学業と仕事をしっかり両立して頑張っていると自負しているし、こうして誘われたときくらいは……休みをもらっても問題ないだろう。

有人は慌ただしく机の片付けを終えると、逸る気持ちに背を押されるように小走りで書斎を飛び出した――。

「いらっしゃい、あっくん♪」

「……待っていたぞ、有人」

「ふふっ、今日もお仕事、お疲れ様」

「う、うん……」

脱衣所で慌ただしく服を脱ぎ捨てて飛び込んだ、秋山家の屋敷で自慢のひとつになっている十畳以上ある広々とした浴室。タイル床を覆うように敷かれたマットの上に、自分を呼び出した美女達が揃って跪き三つ指をついて迎えてくれた。

「こうして仕事を終わった旦那さまをお迎えするのって、新婚っぽくていいわよね」

「ほとんどお家でのお仕事だから、なかなか機会がないものね」

「まあ……たまには悪くない」

微笑み合う長姉と義母、その横で照れ臭そうに視線を外す次姉。

いきなりのことで驚いてドキドキと高鳴る胸を押さえていた有人も、背中がくすぐったいような嬉しいような気分になって頬を火照らせてしまう。

（新婚……確かに、そうだよね）

「どうしたの、あっくん？　ふふっ、これくらいで照れちゃって……可愛い♪」

「ふぇ……んふっ、んん！」

しみじみ心の中で呟いた刹那、いきなり歩み寄ってきた長姉の胸へ抵抗する間もなく抱き寄せられてしまう。

「大人になっても可愛いままのあっくん、大好きよ。いい子、いい子♪」

「はぅっ、は、恥ずかしいって、芯愛お姉ちゃん！　あぅぅっ」

首に手を回され、そのまま頭の上と後ろを両手で優しく撫で摩られる。
幼い頃から毎日のように味わい続けてきた心地よさに、有人は羞恥を訴えながらも振り払えずに身を任せてしまう。
（僕、お姉ちゃん達の旦那さまになったのに……いいのかな、これで）
こうしてみんなと結ばれたのだけど、日々の生活にそれほど変化はない。
朝は三人が競い合うように起こしにやってくるし――ちゃんと目覚ましをかけているのに、なぜかその時間よりも早くやってくるのだが――食事のときには『あ～ん』と食べさせてくれるのも、お出かけ前のキスの習慣も未だに続いている。
なにかあるとこうして優しく抱き締めて甘やかしてもらえるし、夫としてこれでいいのかと疑問を感じないこともない。
「こら、姉さん、いつまでも独り占めするな！」
「そうよ。有人くんを可愛がるときは、みんなで仲良く公平にね♪」
一歩遅れて涼莉と瑠璃子も近づいてきて、有人の顔へ左右から胸を寄せてきた。
「むぐっ⁉　あの……はぅっ！」
頬を押してくるフワフワとどこまでも柔らかい義母の乳房と、ポヨンと大きく弾むような次姉の乳房。顔全体を三人のふくらみに覆われた有人はその熱気で早くものぼせてしまい、意識が急速に蕩けてきてしまう。

（やっぱり、気持ちいい。前よりもずっと……）
結ばれてからの数少ない変化といえば、彼女達の乳房だ。
元々目を見張るようなサイズだったそこが、この数ヶ月でさらにふくらんできた。
もう手の平で全体の半分を掴めるかどうか、その圧倒的迫力の爆乳に包み込まれる快感は、どんなに辛いことがあっても吹き飛んでしまう心地よさだ。
匂いも前より甘くなり、より濃厚なミルクの香りが漂ってくる。
そうなった理由はひとつ。――彼女達のお腹に宿った、より大きな変化だ。
（もうすぐパパになるんだから、しっかりしないと……）
そう自戒しながら、手探りで三人のお腹を順々に撫で回していく。
程度の差はあれ、みんなそれぞれモデルのように細く引き締まっていたそこが――今では爆乳に負けないくらい大きく張り出している。
表皮がパンパンに張りつめ、まるで風船のようだ。
「あふっ、んっ、くすぐったいよ、あっくん……でも、気持ちいい♪」
「お前はここを撫でてくれるのが好きだな……有人」
「ふふっ、私達はいつでも実感できるけど……パパは、こうして触れてみないとわからないものね。赤ちゃんが……どれだけ大きく育っているか」
「うん……んっ……みんな、凄く大きくなったね」

撫でる動きに合わせ、時々奥の方から『ドンッ』と軽い振動が伝わってくる。
将来を誓い合ったあの夜、めでたく三人揃って授かった愛の結晶である赤ちゃんが、もうそれだけ成長してきているというなによりの証だ。
予定も残り一ヶ月を切り、いよいよ父親になる実感が日に日に強くなっている。
「やっぱり、もう少ししっかりしないと。パパがこんな甘えん坊なんて……」
気持ちいいし嬉しいけれど我慢しなければいけないと、小声で自分を叱咤する――が。
「いいのよ、今のままで♪　だって……あっくんは素敵な旦那さまでもあるし、私の可愛い弟くんでもあるんだから。こうしていい子、いい子できなくなるなんて……寂しいわ」
そんな優しい声に合わせ、芯愛は有人の肩に回した腕の力を強めてきた。
抗うこともできず、そのまま以前よりも深くなった双乳の谷間に顔が埋もれてしまう。
「むぐっ！　んふっ、うぅっ……し、芯愛お姉ちゃん……」
「私達なりのやり方でたくさん愛し合うって、みんなで約束したじゃない。ちゃんと旦那さまとして当主の仕事を頑張ってくれているし、パパとして私達の身体のことをいつも気づかってくれている。だから……弟としてたくさん甘えても、赤ちゃん達だって許してくれるわよ。それに、こうしてあっくんとイチャイチャできなくなったら、お姉ちゃん、ストレスで身体を壊しちゃうもん。絶対に却下！　認めません!!」
冗談っぽく軽い口調で言いながら、芯愛は自ら上体を倒してより深々と少年の顔を爆乳

の谷間で挟み込む。耳の後ろ辺りまで埋まり、口も鼻も塞がれて息苦しいくらいだ。
「はぅっ、んんっ、芯愛お姉ちゃん……んっ、苦しいって……あぅぅっ」
「あっくんが変なこと言うからよ。ねっ、すーちゃんとお母さんもそう思うでしょ？」
「まあ……そ、そうだな。けじめはつけているのだから、遠慮することはないぞ、有人」
「ふふっ、そうね。有人くんにいっぱい甘えてもらえた方が私達もリラックスできて……赤ちゃんにもいい影響が出ると思うわ。だから、遠慮しないでね」
口々に賛同する次姉と義母の声を聞きながら、有人はなぜかホッとしていた。
自分にとってもこうして甘やかしてもらうのは、小さい頃からずっとやめられない最高に幸せな時間なのだ。許してもらえるのなら、是非とも続けたい。
弟で、息子で、旦那さまで、パパ。家族の男役をほぼ独り占めできるなんて、ある意味最高の贅沢だ。溺れすぎないように意識しながらも、存分に味わわせてもらおう。
「ふふっ、あっくんったらうっとりしちゃってる。本当にお姉ちゃん達のおっぱいが大好きよね。……じゃあ、ここでいっぱい疲れを流してあげるわ」
「……ふぇっ？」
ようやく胸から放してもらって顔を上げた直後、そう悪戯っぽく微笑む長姉に手を引かれて、洗い場の中央に置かれたバスルームチェアに座らされる。なにごとかと視線をキョロキョロ泳がせている間に、また周囲を美女達に取り囲まれてしまった。

「毎日、お仕事大変でしょう？　ゆっくり休めるように……お姉ちゃん達がみんなであっくんの汗を流してあげるわ。こうして、気持ちよく……あふぅっ」
むにゅるっ……。
そう微笑みながら右の足元に屈み込んできた長姉が、いきなり自らの手で掴み広げた乳房をふとももの辺りへ押しつけてきた。
声を出す間もなく、プルプルと心地よい感触に足を挟み込まれてしまう。
「んはぁっ！　芯愛お姉ちゃん……あ、汗流すって……おっぱいで……はひぃっ」
「好きなんだろう、私達のここが。少々はしたないが……有人が喜んでくれるのなら、これくらいのことは……」
そう説明をしながら左の足元にしゃがんだ涼莉もまた、芯愛と同じように前屈みになって自らの爆乳の谷間を左のふとももへ密着させてきた。
少し汗ばんだ乳肌がしっとりと吸いついてきて、それだけで思わず背筋を震わせてしまうほどのくすぐったい心地よさが腰の方に響いてくる。
「さあ、綺麗に洗いましょうね～、あっくん♪　すーちゃん、ボディソープ取って」
「ああ。あまり動かないでくれよ、有人。洗いづらくなるからな」
そのまま双丘の谷間へトロリと冷たいボディソープを垂らした姉妹が、呼吸を合わせてゆったりと上体を揺さぶり始める。

ニチュ、ヌチュルゥッ、クチュッ。
「はぐぅっ、ああっ！　んんぅっ、あぁうっ、んんっ♪」
ずっしりと重い乳房が肌面に沿って柔軟に形を変えて、股間の付け根から膝の辺りまで余すところなく撫で擦られていく。
小さな音を響かせながらボディソープが泡立ち、それが少しずつ肌面に塗り伸ばされていくのに合わせて動きは段々と加速してきた。
「ふふっ、どう？　おっぱいでゴシゴシされるの、気持ちいいでしょ？」
「聞くまでもない……有人の顔を見れば、すぐわかるだろう。ふふっ……また、女の子のように可愛らしくなって……」
「ふぁぁっ、んんっ！　らぁ、らって……これ……ひんんっ、ううう‼」
背筋が震えるような心地よいくすぐったさが絶え間なく両ふとももに走り、呼吸をするのもままならなくなってくる。タオルとは比べものにならない優しい感触。一緒に入浴して身体を洗ってもらったことは数え切れないくらいあるが、今までで最高の気持ちよさだ。
甘い疼きが当然のように股間も刺激し、彼女達の肢体に反応して初めから半立ちになっていた屹立がお腹にくっつきそうな勢いで起き上がってくる。
「はぁ……んっ、なんだ……もう大きくなってきたのか、有人。し、仕事で疲れているだろうに……そこは本当にタフだな」

「ふふっ、毎日、私達をみんな満足させてくれているんだもん。当然よね♪」
めざとく勃起に気づいた姉妹が、その雄々しくそそり立つ肉棒をうっとりと潤んだ瞳で見つめてくる。その熱い視線に竿肌や雁首、亀頭がじっくり舐められているかのように錯覚してしまい、痺れる熱い疼きがますます強くなってきた。
竿が根元からビクビクと小刻みな痙攣を始め、早くも鈴口から透明の汁が滲み出る。
「あんっ、オチンチンのいい匂いしてきたぁ……エッチなあっくんの匂い♪」
「い、いちいち言い方がはしたないぞ、姉さん。んぁ、そんな風に言われると……わ、私まで意識してしまった……くふぁぁっ、はぁ、はぁうっ……」
肉槍の先端に浮かぶ透明の雫を物欲しげに凝視しながら、二人はより大きくなった爆乳を両手でしっかりと掴み、強くふとももに擦りつけてくる。
何度か往復している間に、そこから甘ったるく濃厚なミルク臭が漂い始めた。
「はぁはぁ……んぅっ、お姉ちゃん達……ぼ、母乳、溢れちゃってる……」
相変わらず陥没気味で、ふくらみから軽く顔を覗かせている芯愛の乳首。
決して大きくはないけれど、ツンとはち切れんばかりに尖っている涼莉の乳首。
それぞれの先から滲み出ている白い液体は、この爆乳いっぱいに満ち溢れているミルクだった。ふとももに押されてたわむ度にじわじわと流れ出し、それがソープの泡と混ざり合って肌に塗り込まれていく。

「んふっ、だって……ミルク出すと、あっくんが喜んでくれるから……はふぅっ、最近、少し感じてくるとすぐにおっぱいの奥が熱くなってきちゃう……んんぅっ！」
「ほ、本来なら赤ちゃんに飲ませる為のものだが、今はまだ有人だけのものだ。遠慮なく感じてくれ……はぁ、はぁ……ああ、出る……まだ溢れるぅ……」
二人は自らの手で乱暴なくらい強く乳房を揉み潰し、より多くの甘液を搾り出す。
ふとももからふくらはぎ、股間の方にもそのほどよく温かい液体が流れてきて、濃密な甘い香りに下腹部全体が包み込まれていく。
「す、凄いよ……いっぱい出てる……」
赤ちゃんの為の母乳で身体を洗い流してもらう。その背徳感と身体中の力が自然に抜けてしまう恍惚とした心地よさに自然と息が荒くなってきた。白く染められている下腹部から目を離せなくなり、無意識のうちにゴクリと大きな音を立てて生唾を飲んでしまう。
「ふふっ、有人くん……本当にミルクが大好きなのね。……暑くて、喉が渇いちゃっているでしょう？　いいわ……さあ、ママの……飲んで」
背中から優しい声を投げかけられたと同時に、肩へずっしりと重いものが載せられた。
今まで姉弟の様子を見守っていた義母が、後ろに屈み込んできたのだ。
慌てて振り返ると、肩に載せられて軽く横長の楕円にたわんでいる乳房の頂点、ぷっくりとふくらんだ乳首からミルクが溢れ出ているのが見えた。

「ママも出てる……おっぱい、たくさん……」
その甘い香りの誘惑に頭の芯が痺れ、羞恥を感じて強がる余裕もない。
大きく右側を向いて硬く勃起した乳首へ唇を寄せると、夢中でそこにしゃぶりついた。
「あふっ、んっ……そうよ、有人くん。乳輪の方も一緒に咥えて……思い切り強く吸って大丈夫だから……あふっ……飲んで、いっぱい……」
「う、うん……んぐっ、ちゅっ、んぐんぐっ……」
言われるまま唇を淡い桜色に染まった乳輪に沿って這わせながら大きく開き、そこ全体を咥え込んで力いっぱい吸う。その度にふくらんだ肉粒が気持ちよさそうに震えて先端から霧状の甘液が迸り、その濃厚な味わいが口内粘膜に染み込んできた。
「はぁぅ、んぐっ、ちゅぅっ、んちゅっ！　ママのミルク……いっぱい出るぅ……」
「いいのよ、いっぱい飲んで。だって……有人くんがママのお腹に可愛い赤ちゃんを孕ませてくれたから、こうしてミルクを出せるようになったんですもの」
上から覗き込むようにして額に唇を押し当ててきた義母が、悪戯っぽく呟きながら身体を揺らし始めた。背中に擦れるパンパンに張りつめた臨月のお腹、自分が孕ませた赤ちゃんの為のミルクを横取りしているような気がして少し申し訳ないが、それでも喉に流れ込んでくる温かい甘液を貪り飲むのをやめられない。
（赤ちゃん産まれたら、我慢するから。それまでは……ね）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

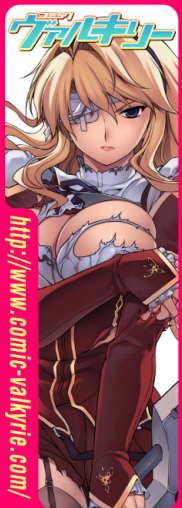
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!